

『文月浅間記』の出版事情

——天明噴火物語と上毛狂歌世界——

水村 暁人

はじめに

二〇〇九年七月四日、「書物・出版と社会変容」研究会の七月例会において、筆者は『文月浅間記』の流布・出版過程——天明噴火物語研究序説——という報告を行う機会を得た。本稿はその際に得た知見、及び同研究会有志により実施された東上州調査^①における成果にもとづくものである。

『文月浅間記』とは、上州高崎の女流俳人羽鳥一紅が天明三（一七八三）年の浅間山噴火（以下、天明噴火と略記）を克明に書き記したものである。その流麗な文章が評判となり、江戸や京都の文人の間で広く流布したと

いわれる。噴火後約三〇年を経た文化十二（一八一五）年には出版に至った。

天明噴火には、『文月浅間記』をはじめ作品性の高い史料が少なくない。筆者はそうした史料群を「天明噴火物語」と称し総合的な把握を試みているさなかにある^②。その経過報告として行なった七月の例会の場において、高橋章則氏より、『文月浅間記』の出版本の蔵板者は狂歌師であろうとの指摘を受けた。蔵板者についてまったく見当がついていなかった筆者にとつてその指摘はまさに不意をつくものであったが、それが縁となり、報告から約一カ月後の八月半ば、高橋氏らとともに東上州の狂歌関連調査を敢行することとなった。

今回の調査を経て明らかになってきたのは、『文月浅間

『記』の出版に上毛の狂歌師が深く関わっているという事実である。本稿では、これまで不明とされてきた『文月浅間記』の蔵板者に関する新たな事実を紹介するとともに、上毛狂歌世界と『文月浅間記』の流布・出版とのかわりについて若干の考察を加えることとしたい。

一 『文月浅間記』を出版したのは誰か

(一) 『文月浅間記』の二つの系統

『文月浅間記』が記されたのは、噴火と同年の天明三(一七八三)年と推定されている⁽³⁾。現在、原本とされるものは見つかっていない。筆者は現在、四〇点あまりの『文月浅間記』(類本を含む)を把握している(表1)。そのうち出版本は三点が確認できる。

『文月浅間記』の写本は、現在群馬県及び東京都内の公共機関にのこされているものが最も多い。群馬県立図書館所蔵本などわずかな例外を除き、その入手経路や元の所蔵先が明らかとなっていない場合が圧倒的に多いため、写本の流布過程を詳細に追うことは困難である。し

かし写本の表現・内容形式を分析してみると、そこにくつかりの特徴を見出すことができる。前稿ではそうした表現・内容上の特徴を抽出して分類し、写本には大別して二つの系統がみられることを明らかにした⁽⁴⁾。筆者は二つの系統をそれぞれ「鬼本」「狐本」と便宜上呼んでいる(前稿では、「鬼本」が京都文人を中心に、「狐本」が上州近隣地域を中心に流布した可能性が高いことを示唆した)。ちなみに出版本は狐本系統の特徴を有している。

(二) 蔵板者

出版本の表現・内容がどのような系統に属するのかわかるとまず明らかになったものの、その出版の経緯についてはいまだ不明な点が多い。わずかに手がかりとなるのは、出版本の跋文である。

上毛高崎 羽鳥氏女 一紅述

茅花園

【表1】『文月浅間記』写本・類本一覧 2010年1月現在

No.	表題	筆写者・時期	出典・翻刻	所蔵	特記
1	文月浅間記/安佐間記		史料集成Ⅱ-p292	船津恒平氏/群馬県立文書館	
2	浅間の消息	湯浅義保	史料集成Ⅱ-p307	篠木弘明氏/高崎市立図書館 伊山亭文庫	
3	文つきの記	天明3年10月、播磨清洵 (清田儷斐)	史料集成Ⅲ-p223	青木吉氏(浪川市)	清田儷斐序文
4	訳一紅上野大宴記	漢学者釈顕常(京都 相国寺)	史料集成Ⅲ-p231/『大日本 地震史料』第2巻p706	詩文集『北禅遺草』	漢文 漢学者釈顕常による
5	信州浅間焼	天明4年9月、丘思純(京都 医者)	史料集成Ⅴ-p93/『改定史 籍集覧』雑第336	上野帝国図書館	丘思純跋文
6	文月浅間記[木版刷]	文化12年、茅花園・壺梅 園蔵板	史料集成Ⅴ-p99	愛知県西尾市岩瀬文庫	
7	浅間の消息	安中藩家老、天明9年8月	史料集成Ⅴ-p105	美濃部昭夫氏(安中市)	美濃部家=日安中藩家老 篠 木家本と類似 由来記す
8	浅間山之記	天明3年10月、清田儷斐	徳田『新考文月浅間記』p25	国立公文書館内閣文庫	清田儷斐序文
9	信州浅間嶽災前紀事	天明3年	『大日本地震史料』第2巻p600	宮内庁書陵部(静幽堂叢書58)	
10	—		—	旧群馬県女子師範学校郷土資料 室	杉山栄一郎氏校注
11	信濃浅間岳炎上記	伊勢神宮神主荒木田経 雅、天明5年	解説が史料集成Ⅲ-230にア リ	伊勢神宮司庁 神宮文庫	伊勢神宮神主荒木田経雅が 「文月の記」を写す
12	文月の記			宮内庁書陵部(片玉集64)/国 文学資料館	清田儷斐跋文
13	文月浅間記	寛政写		東京国立博物館	国書総目録
14	文月浅間記		『高崎市史』	本多理一	高井家本を転写か
15	信州浅間焼[木版刷]	文化12年、茅花園・壺梅 園蔵板	徳田『新考文月浅間記』p11 (史料写真掲載)	静嘉堂文庫	所在不明
16	信州浅間焼			旧東京教育大学	国書総目録
17	信州浅間焼			旧三井文庫	国書総目録
18	浅間山焼之記	天明3年10月、播磨清洵 (清田儷斐)		群馬県立歴史博物館	清田儷斐序文
19	浅間嶽砂降記			祐衛文庫(兵庫伊丹市岡田利兵 衛)	国書総目録
20	文月浅間記		徳田『新考文月浅間記』p11	高井東一家(高崎神社司)	徳田進『羽鳥一紅の人と文学』 に口語訳あり
21	文月物語			高崎市立図書館伊山亭文庫	
22	文月浅間記[木版刷]	文化12年、茅花園・壺梅 園蔵板	群馬歴史石井論文	高崎市立図書館田島文庫	群馬県立歴史博物館25(石井 論文)に口語訳あり
23	文月浅間記	志倉西馬(高崎俳人)		高崎市史編纂室	閲覧不可
24	文月浅間記		新編高崎市史資料編8	群馬大学附属図書館	書の評判を末尾に記す
25	文月浅間記			静岡県立図書館	「浅間砂降記」カ
26	信州浅間山噴出泥押シ実記	大正2年、子持村寺島伝 一郎	史料集成Ⅱ-p185		所々引用
27	癸卯災異記	天明三年秋、川野辺寛 (高崎藩士)	史料集成Ⅲ-p212	高崎市立図書館『御家事大概附 録 全』	所々類似
28	浅間山焼記(浅間山焚記)	元龍(群馬郡大久保村医 師)	史料集成Ⅲ-p370	東北大学狩野文庫(榛名山御師 佐藤求馬蔵本写)	後半部引用
29	浅間山焼記/浅間山焚記			旧彰考館文庫(空襲にて焼失)	
30	文月記/浅間山焼記の付			慶応大学図書館(所在不明)	
31	文月記	寛政3年写		旧浅野図書館(所在不明)	
32	砂降記	天保5年カ、良翁(高崎新 町延養寺僧)	新編高崎市史資料編8-p81 7	佐藤瑛照氏(高崎市新町延養寺)	版本のみ、部分カ、前1/3のみ 類似
33	七月の記			国会図書館マイクロ「扶桑残集 集」20	
34	信州浅間焼の事/七月ノ記	神沢社口	「翁草」(日本隨筆大成第22 巻)		
35	七月の記/天明三年浅間山 噴火之記		天明三年浅間山噴火史料集 上p314	亀井孝氏(渋谷区初台)	
36	文月物語			国会図書館マイクロ	
37	天明三年浅間大噴上記	明治43年3月、佐藤上州 子		群馬県立文書館(佐藤善三郎家)	
38	天明癸卯浅間嶽燃之記	天明3年10月、播磨清洵 (清田儷斐) 久保氏筆写		群馬県立文書館(草津町教育委 員会)	清田儷斐序文
39	上毛雨變記			群馬県立文書館(高橋謙氏収集 文書)	
40	文月物語	天明3年10月、播磨清洵 (清田儷斐)		洲本市立図書館	清田儷斐序文、鈴木俊幸氏 の御教示による

こはかみつけの国高崎のうまやとり羽鳥氏の刀自一紅乃うし、皇国ふりのかんなもて眼のあたり見もしきゝもしかいつゝりたる此一卷、ちかきわたりの人々はさらなり、うちわたす遠かた人さへ、よりくに見まほしとさうぞこしてもとめ来せしに、そかさきゝゝめぐりゝゝ二て、あはれくちなん事をおそれ、はたおのれかゆかりある事を知りて、友とちのすゝめけるかまゝ、こたび桜木にものして、其人々におくりまいらすになむ、文化十あまりふたとせといふとしの霜ふる月、多胡廻屋の直温かまをす、

まず跋文には「茅花園 壺梅園 藏板」とある。従来、この藏板者について詳細は不明とされてきた。⁵⁾しかし今回「狂歌師である」というヒントを得て調査を試みたところ、以下のような事柄が明らかとなった。

江戸く明治期の狂歌師約三〇〇〇人を網羅した『狂歌人名辞書』⁶⁾には、両者にあたると思われる人物の記載が

ある。まず「茅花園」は、狂号春山若枝、通称は豊田照房という。上州大間々に住し、初代浅草庵門人となった人物であるという。さらに彼は、文政期に発刊された『狂歌人物誌』⁷⁾にも画像入りで紹介されており、以下の記述からは「柔和」かつ「不舌」⁸⁾口下手な彼の性格までもうかがい知れる（【図1】参照）。

上野大間々に住す、豊田氏、姓八橋名八照房、浅草庵の門に在て、茅北園^茅と号す、本性は柔和にて且不舌なり、人に対するに心緒を述る事あたはず、歌を詠するの外他事なし、

もう一人の藏板者「壺梅園」も、同じく『狂歌人名辞書』にその名をとどめている。狂号を壺梅園守枝、別号を綴玉子と号し、通称は江利川勘兵衛。上州前橋の人であることがわかる。そのほか三代目浅草庵黒川春村の編集による画像集『草庵五百人一首』⁸⁾のなかにも彼の画像が描かれている（【図2】参照）。

このように、『狂歌人名辞書』をはじめとする近世狂歌師の人名録には、「茅花園」「壺梅園」についての記載が

【図1】茅花園こと春山若枝（『近世上毛雅人画像集』より転載）⁽⁹⁾



みられる。両者とも上州ではある程度名のある狂歌師であつたとみてよい。従来、「茅花園」「壺梅園」の名称は江戸の書肆名をさすのではと推測されてきたが、実はそうではなく上毛の狂歌師であつたのである。

【図2】壺梅園こと江利川勘兵衛（同上）



(三) 多胡廻屋は何者か

蔵板者を上毛の狂歌師であると特定した上でさらに検討すべきは、跋文にみられるもう一人の人物、「多胡廻屋の直温」である。跋文によれば、彼は羽鳥一紅と「ゆか

りある」人物であり、『文月浅間記』の写本を一冊所有していたようである。直温はその『文月浅間記』の貸与を方々より求められており、度重なる貸与により冊子が「あはれくちなん」ことを恐れた彼が、友人のすすめもあって出版に踏み切ったという。

では「多胡廻屋の直温」なる人物は何者か。幕府代官の竹垣直温をさすという説もあるが、根拠は不明である。⁽¹⁰⁾

試みに、前述の『狂歌人名辞書』から直温という名の狂歌師を引いてみると、中川直温、清水直温という二人が浮かび上がる。中川直温は狂号を雲仲道、別号越廻屋という。越後出身で天保頃江戸の市が谷に住んだということのみ判明する。⁽¹¹⁾ 清水直温は、狂号を菖蒲軒風、別号を射流園と称し、江戸の星が岡の人である。⁽¹²⁾ 両者とも江戸の人物であること以外は詳細が不明であり、今のところ上州狂歌界との関係性はみえない。「多胡廻屋」という狂歌号を持っていた形跡もない。

逆に「多胡廻屋」という号から迫ってみると、上州高崎に多胡石文という狂歌師がいたことがわかる。⁽¹³⁾ 狂号は日本三大古碑のひとつである多胡碑（現・高崎市）からとったものであろう。石文は葎庵二代目で別号和堂石文、

通称土屋補三郎という。⁽¹⁴⁾ 老平（おいひら）という名を好んで使ったという。⁽¹⁵⁾ 彼は明治二〇（一八八七）年に四九歳で死去していることから、天保九（一八三八）年生まれであることがわかる。出版年が文化十二（一八一五）年であることを考えると時代が合わない。さらに石文が別名直温と名乗っていた様子もない。

ちなみに初代の葎庵は、石文の実父で葎庵東雄、通称武居世平（よひら）と称する人物である。六方園、古調園、蔭好とも称し、幕末期の高崎狂歌壇の中心として活躍した。⁽¹⁶⁾ 彼は明治十四（一八八一）年に八四歳で死去しており、文化十二年には十八歳であったことを考えると、こちらのほうがまだ可能性がある。しかし今のところ彼が多胡石文の名を称したか否か、また直温という名を用いたか否かは定かではない。これらを総合して、ひとまず现阶段では跋文の「多胡廻屋の直温」なる人物に関しては不明とせざるをえない。

しかし「茅花園」「壺梅園」については、上毛地域で活動した狂歌師ということが特定できた。すなわち、『文月浅間記』の出版には上毛の狂歌師がかかわっているのである。では、『文月浅間記』の流布・出版と上毛の狂歌と

のかかわりはいかなるものなのか。次に、上毛における狂歌世界の様相について整理してみたい。

二 東上州の狂歌壇と茅花園・壺梅園

(一) 上毛の狂歌

近世における狂歌の流行は、一般に十八世紀後半以降であるといわれている。天明期の江戸では、当代の人気戯作者や歌舞伎役者、新吉原関係者、さらには旗本や大名の子弟をも巻き込んだ一大流行が巻き起こったが、この流行は文学史上、「天明ぶり」「天明調狂歌」「天明狂歌」などと呼ばれている。¹⁷⁾

その狂歌流行の中で、大田南畝(蜀山人、四方赤良)の率いる四方連、唐衣橘洲の酔竹連、元木網の落栗連など多くのグループが形成された。江戸での爆発的な流行からやがて地方的な展開を見せた狂歌は、地方文人のたしなむ学問・文芸のひとつとなり、地域文人のサークル(人脈)のひとつの核となっていた。¹⁸⁾

天明期以降のこうした狂歌の地方的展開の中で、典型

的な隆盛の様相を呈した地域こそ、『文月浅間記』の著者羽鳥一紅の居住した上州高崎であり、蔵板者茅花園の居住した上州大間々(現・みどり市)であった。

全国三〇〇〇名の狂歌師を網羅した『狂歌人名辞書』から上州出身者を抽出してみると、その数一三七名、全体の約五%にのぼることがわかる。一見するとそれほど高い比率とは見えないが、『狂歌人名辞書』にみられる狂歌師の半数以上が江戸や京・大阪出身者であることを考慮すると、一地方としては、上毛の狂歌師の比率はかなり高いものであるといえる。

ちなみに上州出身の狂歌師一三七名のうち四三名が高崎の人である。城下町でもあり中山道の要宿でもあった高崎では、近世を通じて町人による諸文芸が栄えた。狂歌・俳諧・和歌などジャンルを問わず優れた文人が数多く輩出されたことが知られている。羽鳥一紅もそうした土壌の中で俳諧をたしなみ、『文月浅間記』という出色の噴火物語を生んだ。一紅が狂歌をたしなんだという証拠はないものの、天明期以降、高崎の町人らが盛んに取り組んだ文芸の一つに狂歌をあげることができる。¹⁹⁾

『狂歌人名辞書』において高崎に次ぎ上州でその数が

【表2】市町村別上毛狂歌師数
(5名以上)

市町村名	人数
高崎市 (旧吉井町含む)	43名
前橋市	14名
みどり市 (旧大間々町)	13名
桐生市	11名
富岡市	8名
安中市	7名
館林市	7名

『狂歌人名辞書』より作成

宿場町大間々こそが、高崎につぐ上毛狂歌壇の中心地であったことは特筆すべきである。

(二) 大間々と浅草庵

江戸の数ある狂歌連のうち、天明の流行直後から上州に伝わったのは大田南畝の「四方連」と宿屋飯盛の「五側」であった。⁽²⁰⁾ 四方連・五側の両狂歌連が上州の政治・

際立つのが、大間々・桐生の出身者である(【表2】)。

大間々は東に絹を主産業とする在郷町桐生と隣接し、北に足尾の山々が迫り、南に広々と関東平野を望む傾斜地で、渡良瀬川の形成した河岸段丘・扇状地の要に位置する。足尾の銅山から産出される銅を運ぶ通称「銅(あかがね)街道」の宿場であった。この脇街道の一

経済・文化の中軸としての高崎に栄えたのに対し、大間々における狂歌の隆盛には、いわゆる「壺側」に属した大垣守舎という人物の存在が大きい。⁽²¹⁾

大垣守舎は大間々桐原の人で、安永六(一七七七)に生まれ、文政十三(一八三〇)年に没した。本姓を深澤新兵衛、はじめ十日亭といったが、のち雨守舎と改号した。江戸に往来し大垣市人の門下となっている。大垣市人は浅草田原町の人で、本姓大垣徳太郎、通称伊勢屋久右衛門という。この市人が四方連から独立して浅草庵と称し、その社中が「壺側」と呼ばれるようになった。その市人の元に往来したのが守舎であり、彼を通じて大間々地方へ壺側狂歌が伝わったのである。その守舎は、文化二(一八〇五)に壺側の判者を許され、浅草庵を名乗った。文化年間の上州では、守舎の行脚による社中拡大により、浅草庵社中が爆発的に多くなっていた。⁽²²⁾

やがて文政三(一八二〇)年の市人死後、守舎は市人を継ぎ二代目浅草庵を名乗る。このとき深澤姓を大垣に改めている。大間々から江戸の代表的な狂歌連の師匠を継ぐほどの者が出たということが、大間々狂歌壇をさらに活性化させるものであったことは想像にかたくない。

まさに彼の活躍した文化・文政期こそ大間々の狂歌壇の全盛期であつた。実際この時期の大間々地域では盛んに月並の狂歌会が催され、また全国の狂歌集や狂歌番付にも大間々の狂歌師が多く名を連ねている。大間々地域は、浅草庵を継いだ大垣守舎を核として、文化・文政期頃には上毛の狂歌界の中心として栄えたのである。

(三) 茅花園・壺梅園

ここで改めて、『文月浅間記』の蔵板者である「茅花園」「壺梅園」についてみてみたい。

大間々の修験者であり狂歌師でもあつた大泉院良賢という人物がいる。彼が残した『大泉院日記』⁽²³⁾には、彼が参加した狂歌の歌合せや狂歌師との日常的なかわりに関する記述が散見される。日記は文政二年から嘉永六年にわたるものだが、その間この地域で一、二ヶ月に一度のペースで継続的に月並の狂歌会が催されていることが具体的に見て取れる。日記の文政二（一八一九）年一月八日の項には、次のような記述がある。

一、八日 晴天

鹿沼に狂歌会あり、守舎・浪丸・若枝・拙院にて
供老人右五人同道にて行、佐野天明丸壺や泊り、

ここには、大間々から下野国鹿沼(現・栃木県鹿沼市)へ大泉院ら五名が狂歌会に出かけていることが記されている。まずここから大垣守舎が文政二年の段階では大間々の地で活動をしていることが読み取れる。さらに、その大垣守舎や大泉院と同道した人物の一人である「若枝」とは、先の「茅花園」こと春山若枝である。つまり茅花園は、大間々地域の狂歌壇の中心であつた大垣守舎と直接的な親交があつたことがうかがい知れよう。

もう一方の蔵板者である「壺梅園」こと江利川勘兵衛と守舎とのかかわりはどうであろうか。まず狂号であるが、十九世紀以降、狂歌師の多くはその所属する狂歌連を示す字を自らの狂号に含むことが顕著となることが知られている。⁽²⁴⁾ 狂号「壺梅園」に「壺」の字がみられることから、彼は「壺側」の社中に属していたと考えられる。壺側とはすなわち守舎も属した浅草庵の社名に他ならず、壺梅園も浅草庵こと守舎と関わっていた可能性を指摘で

きる。

また次に示した【図3】は、浅草庵の主催する月並の狂歌合における年間の高得点者を掲載したものである。⁽²⁵⁾年間七点以上をあげた者には「浅草庵月並 草庵狂歌集」の「摺本」を進呈すると記されているが、その「摺本」進呈者のなかに、壺梅園こと江利川守枝の名がみえる（矢印部分）。

これらのことから、前橋の人物である壺梅園もまた浅草庵の形成する大間々の狂歌ネットワークの中で狂歌をたしなんでいた人物であることがわかる。

このように、『文月浅間記』の出版に関わった二人の狂歌師は、浅草庵こと大垣守舎を核とした大間々地域の狂歌壇に身をおいた狂歌師であった。また『文月浅間記』が出版された文化十二年前後の時期は、まさに彼ら二人がその東上州の狂歌壇において活発に活動していた時期にあたる。『文月浅間記』は、このような上州狂歌の活況のなかで出版へと至ったことが指摘できるのである。

おわりに

『文月浅間記』の蔵板者は長らく不明とされてきたが、今回の調査を通じ、上毛の狂歌師であることが浮かび上がった。その事実から、『文月浅間記』の流布・出版に関して以下のようにとらえることができるだろう。

まず、『文月浅間記』の数ある流布経路の一つとして、上毛の狂歌師というルートを想定することが可能である。『文月浅間記』における二系統（鬼本・狐本）のうち、京都の文人を中心に評判となり書き写された鬼本系統に対し、狐本系統の写本はいったいどのように流布していたのか、これまで不明な点が多かった。しかし狐本のうち少なくとも出版本に至る一系統は、大間々地域を中心とした狂歌師の人的ネットワークを通じて筆写され、ついには出版へと至ったと考えられる。

また、『文月浅間記』の出版された時期の問題について、以下のようにとらえることが可能である。かつて筆者は、『文月浅間記』が噴火から三〇年という年月を経て出版されることになった背景として、①被災から復興し災害

【図3】「浅草庵月並 草庵狂歌集」進呈者

補助 江戶 法門總達	七爰以上各并撰本 二首合為甲乙録呈上	月九	月八	月七	月六	月五	月四	月三	月二	月一	淺草庵 月並 草庵狂歌集 二冊
		水鳥 埋火	紅葉 氷	鹿 袴衣	七夕 草花	下之卷 納涼	菖蒲 更衣	暮春 櫻	春曙 櫻	立春 梅	



全井
全中畝
全八寄
全前橋
全大間々
全花輪

雪壺芽壺淺
蹄翼周露玲芽
花園隈園梅菴
駙守阪守守竜
寸輔磨海一海

壺壺壺壺壺
丈礙征絃梅原
樓樓樓樓園菴
一夢守桐守糸
尙成寄丸枝成

辰
巳
亭
風
雄

壺
雲
亭
一
極

壺花壺淺
日田学馨
園亭梅菴
守一守一
照襲子既

壺
光
園
樹
伊

(矢印部分拡大)



を語る（あるいは顕彰する）ようになるまでにそれだけ時間を要したこと、②書物・出版文化の成熟期とのかわり、などの観点から説明を行った。⁽²⁶⁾しかし今回①②の要素に加え、③上毛における当該期の狂歌世界が活況を呈していたこととの関連性を指摘することができる。

上毛の狂歌世界にとっての文化・文政期とは、守舎が江戸の浅草庵との間を往来し、大間々地域の狂歌壇を盛り上げ、さらに二代目浅草庵を襲名するに至った時期であった。その守舎と深く関わりながら大間々の狂歌壇で活動していた茅花園・壺梅園の両名が『文月浅間記』を出版していたという事実は、狂歌を媒介とした上毛の文人ネットワークのなかで『文月浅間記』が評判となり、広く読まれ、その末に出版に至ったことを想像させるものである。

残念ながら上毛の狂歌師間における流布の具体的な様相を明らかにすることは困難であるが、おそらくは複数存在したであろう『文月浅間記』の流布経路の一つとしての上毛狂歌世界を今回「発見」できたことは、天明噴火物語の読み手の問題を考える上で示唆に富むものである。その問題については今後の課題としたい。

【注】

- (1) 二〇〇九年八月十一〜十三日の日程で実施。「書物・出版と社会変容」研究会の二〇〇九年七月例会後、懇親会の場にてわかに企画が持ち上がり、即実施の運びとなった。参加者は荒木美緒知氏、岩坪充雄氏、坂本達彦氏、杉仁氏、高橋章則氏、水村暁人の六名。高崎市立図書館俳山亭文庫、旧大間々町誌関連史料を中心とした狂歌関連の史料調査、及び高崎・大間々地域の拓本採取を行った。
- (2) 成果の一部は、拙稿『文月浅間記』の流布・出版過程―天明噴火物語研究序説―（『群馬文化』二九八号、二〇〇九年）に掲載。
- (3) 徳田進『新考文月浅間記』芦書房、一九八五年。
- (4) 前掲拙稿。
- (5) 石井里和氏は、両蔵板者について「版元であると思われるが、詳細不明」としている。（石井里和「羽鳥一紅と『文月浅間記』―女流俳人一紅の捉えた浅間山大噴火―」、『群馬県立歴史博物館紀要』二五号、二〇〇四年）。
- (6) 狩野快庵編 一九二八年（一九七七年、臨川書店より再刊）。
- (7) 芍葉亭長根編 文政一〇年刊、国立国会図書館蔵。
- (8) 黒川春村編、天保四年刊、国立国会図書館蔵。
- (9) 篠木弘明編 みやま文庫、一九七八年。
- (10) 『新日本古典文学大系九七』、三六四頁。

- (11) 『狂歌人名辞書』 一五七頁。
- (12) 『狂歌人名辞書』 一六九頁。
- (13) 『群馬県近世史資料所在目録六（高崎市）』、群馬県教育委員会、一九七九年。
- (14) 『狂歌人名辞書』、十六頁。
- (15) 高崎市四ツ屋町、土屋喜英氏の「教示による」。
- (16) 『新編高崎市史』 通史編、三卷、六八六頁。
- (17) 小林ふみ子『天明狂歌研究』、汲古書院、二〇〇九年。
- (18) 高橋章則『江戸の転勤族』、平凡社選書、二〇〇七年。
- (19) 『新編高崎市史』 通史編、三卷、六八五頁。
- (20) 『大間々町誌』 通史編、上巻、九二七頁。
- (21) 『大間々町誌』 通史編、上巻、九二八頁。
- (22) 『大間々町誌』 通史編、上巻、九二八頁。
- (23) 『大間々町誌』「基礎資料Ⅶ」大泉院日記』、大間々町誌刊行委員会。
- (24) 高橋章則「当座」という歴史空間——「狂歌」を歴史資源化する」（『江戸文学』三九号、ぺりかん社、二〇〇八年）。
- (25) 深澤博介家文書（『大間々町誌』「基礎資料Ⅱ」桐原地区諸家文書目録』、大間々町誌刊行委員会）。
- (26) 前掲の拙稿を参照のこと。

【付記】

本稿の作成及び八月の調査に際して、高崎市立図書館の杉原氏・曾江氏、みどり市教育部文化財課の佐藤圭悟氏、みどり市大間々町神明宮の齋藤巖氏には大変お世話になりました。末筆ながらこの場をお借りして御礼申し上げます。